

日生), オランウータン1頭(メス, 1983年12月10日生), ヒト2名(男1, 1983年10月30日生, 女1, 1983年11月19日生)。隔週20~27回観察。

方法: ①ボイタ法による誘発手技を中心とした姿勢反応検査(11試行), ②ヒト乳児で標準化された知覚運動機能に関する発達調査(「子どもの発達と診断」田中ら, 大月書店)の実施。

結果と考察: 姿勢反応は, チンパンジー, オランウータン, ヒトにおいても, すでにマカクで見出したと同様の変化があった。すなわち, 四肢屈曲(支持反応未出現), 上肢伸展(上肢による身体支持)の段階を経て, 下肢伸展(上下肢による身体支持)の段階へと順序的に変化した。また, 類人猿, ヒトでは四肢屈曲の段階はさらに a. 全体的屈曲および b. 体幹伸展の時期に区分された。姿勢反応の各段階における知覚運動機能の特徴をみると, 類人猿のばあい, 四肢屈曲の段階に注視や追視が可能になる。上肢伸展の段階になると, 到達行動やモノの把握がはじまる。下肢伸展の段階では, 両手の同時使用や操作における目と手の協応, 示指の使用など対象操作行動が複雑かつ巧緻になり, ヒトと類似の行動型が多く出現する。ヒトでは四肢屈曲の段階でモノの把握や目と手の協応がはじまる。しかし, 到達行動は上肢伸展の段階にならないと出現せず, マカクもふくめ, 姿勢反応の各段階と出現する対象操作行動との関係には系統発生的な類似がみとめられた。また, ヒトでは下肢伸展の後期にいれる, おく, つむなど, 定位的調整がはじまる。オランウータンではモノにモノをおしつける行動, チンパンジー, ニホンザルでは壁にモノをこすりつける行動がみられた。

課題 8

ニホンザル体毛の地域差についての研究

稲垣晴久(日本モンキーセンター)

体毛は哺乳類=恒温動物にみられる大きな特徴であり, 外界と動物の体との間に空気の層をつくることで熱交換を防ぎ, 体温の恒常性の維持に大きな役割を果たしている。本研究は, そのニホンザルの体毛の地域差を形態学的に明らかにし, 幅広い生息環境に適応している, ニホンザルという種の特徴を明らかにすることを目的とする。

現在, 全国各地に生息するニホンザルから, 皮ふの一部と体毛の収集及びその形態学的研究を進めており, 本年度は高崎山と関東地方に生息するニホンザルの集団から材料の収集をおこなった。

これにより, 現在までに材料の収集ができた地域は, 皮ふについては8地域, 体毛については13地域となった。

これらの材料に関しては, まだ分析の途中であるが, これまでに得られた長さ・密度のデータをアダルトのものについてのみ比較してみると,

1. 毛の長さ(背部体毛の60~100本の平均値)
地獄谷=63.6mm(n=11)>下北=59.0(n=5)
>波勝=51.9mm(n=2)>日吉町=51.5mm(n=5)
>宮島=51.0mm(n=3)>高崎山=41.8mm(n=4)

2. 毛の密度(本数/1cmサークルの皮ふ)
下北=1028.9(n=12)>関東=876(n=4)
>高崎山=855.7(n=7)>波勝=793.5(n=4)
>宮島=745(n=4)>大堂=641.5(n=2)

という結果になった。この結果は, ニホンザルの毛の長さについては“Cline”が認められることを示唆するものであった。しかし体毛密度については, 下北のもので高く, 大堂のもので低い値が認められたものの, 高崎山のサルが比較的高い値を示しており, その解明が今後の課題として残された。

骨標本の計測によるニホンザルの地理的変異

黒田末寿(京大・理)

ニホンザルの地理的変異を明らかにするために房総半島(B), 京都府北部(K), 小豆島(S), 高崎山(T), 屋久島(Y)由来の骨標本を主な対象として, ①頭蓋骨の計測, ②頭蓋骨の非計測的変異形質, ③長骨の計測をおこなってきた。①の結果は58年度共同利用研究報告に述べたが, B集団の特殊化が始まった時期を明らかにするために房総出土の縄文時代早期, 後期のニホンザルの下顎骨と比較した。これによると, 縄文時代のサルはK, Tの非特殊化集団のB集団との中間に位置し, B集団の特殊化の開始は縄文時代からあまり逆のほらなことがわかった。

②の出現頻度は各集団で大きな片寄りが見られ,